

授業概要			
学 科	第 1 鍼灸科	学 年	1 年
単 位 数	2	必要時間数	30
担当教員	高木 裕貴		
授業形態	講義 (動画+対面)	教 室	ホームルーム
授業目的	医療を含むあらゆる社会活動は、近代社会という特定の文脈のもとで成立している。とりわけ医療という分野は、医療技術の発展にともなう社会問題の医療化や、グローバル化の進展にともなう社会構造の変動など、社会現象と不可分に結びついており、近代社会に対する理解が、よりよい医療の実現にとって重要な条件となる。そこで本授業では、社会学の考え方を簡単に概観した後、社会学の各トピックを横断的に扱うことで、社会学の問題意識や考え方を、身の回りの事象を捉えて理解するための導きとし、職業人としての自らの判断に役立てられるようになることを目指す。		
教科書	なし		

具体的な到達目標	
目標 1	社会学で用いられる諸概念の内容を説明することができる。
目標 2	社会学の諸概念をもちいて、身近な現象を分析して説明することができる。
目標 3	社会学の諸概念をもちいて、身近な現象に対して自ら判断をくだし、その根拠を説明することができる。
目標 4	
目標 5	
目標 6	
目標 7	
目標 8	
目標 9	
目標 10	

評価と試験			
前 期		後 期	
試験成績	70		
平常点	30	算出方法	算出方法
出席点		算出方法	算出方法
その他		算出方法	算出方法
試験日			

* 追再試験、最終再試験にて合格の場合は、平常点や出席点、その他の評価は反映されず、試験成績のみが評価対象となります。

担当教員の実務経験

実務経験

有

無

教員の実務経験

実務経験

をいかした

教育内容

授業の内容

回数	日程	内容	備考
1		イントロダクション：社会学とは何か	
2		社会的行為とは何か	
3		社会学の役割は何か	
4		社会秩序はいかにして可能か	
5		家族の社会学	
6		教育学の社会学	
7		職業・労働の社会学	
8		ジェンダーの社会学	
9		民族・エスニシティの社会学	
10		メディアの社会学	
11		都市の社会学	
12		グローバリゼーションの社会学	
13		宗教の社会学	
14		医療の社会学	
15		まとめ：社会学から何を学ぶか	

その他の事項

授業では、レジュメを配布します。試験では持ち込みありで論述問題を出題予定です（授業で登場する人物名や著作名を暗記する必要はありません）。

基礎分野

(生物学) シラバス

京都仏眼鍼灸療専門学校
2023 年度シラバス

授業概要			
学 科	第 1 鍼灸科	学 年	1 年
単 位 数	2	必要時間数	30
担当教員	益田 敦子		
授業形態	講義 (動画+対面)	教 室	ホームルーム
授業目的	<p>生物学とは、生物がどのようなしくみで生命活動を営んでいるかを探求する学問であるが、本講義では、主に生物の体がどのような物質できているか、また生物の基本単位である細胞の各細胞小器官の構造と働き、増殖の方法を学ぶ。さらに原核生物、真核生物、ウイルスの違いについて学ぶことにより生物の基礎知識を身につける。これらの基礎知識は医療系学生が主に生理学、解剖学を学ぶ際の理解の助けとなることが期待される。</p>		
教科書	教科書は指定しない		

具体的な到達目標	
目標 1	生物の特徴について説明できる。
目標 2	生体を構成する物質 (水、タンパク質、糖質、脂質) それぞれの構造や性質について説明できる。
目標 3	生体を構成する物質 (水、タンパク質、糖質、脂質)、それぞれの生体内における働きを説明できる。
目標 4	細胞膜の構造について説明できる。
目標 5	細胞膜における物質輸送について説明できる。
目標 6	細胞小器官について、それぞれの形態の特徴と機能を説明できる。
目標 7	原核生物と真核生物の違いを説明できる。
目標 8	細菌の構造について説明できる。
目標 9	ウイルスの構造と特徴について説明できる。
目標 10	細胞の増殖の仕方 (体細胞分裂、減数分裂) について説明できる。

評価と試験			
	前 期	後 期	
試験成績	85%		
平常点	15%	算出方法	授業態度により判定
出席点		算出方法	算出方法
その他		算出方法	算出方法
試験日			

* 追再試験、最終再試験にて合格の場合は、平常点や出席点、その他の評価は反映されず、試験成績のみが評価対象となります。

担当教員の実務経験			
実務経験	有 <input type="checkbox"/>	無 <input type="checkbox"/>	
教員の实務経験			
実務経験をいかした教育内容			

授業の内容			
回数	日程	内容	備考
1		ガイダンス、生物の特徴、トピック（感染症の再来）	
2		生体を構成する物質全体について、水の性質と生体内における働き、タンパク質の構造	
3		タンパク質の構造と性質 タンパク質の種類と生体内における働き	
4		糖質（単糖類、二糖類、多糖類）の構造と性質、糖質の生体内における働き、	
5		脂質（単純脂質、複合脂質）の構造と性質、脂質（誘導脂質）の構造と性質、	
6		脂質（誘導脂質）の構造と性質、脂質の生体内における働き、無機質の生体内における働き	
7		細胞の発見と細胞説、細胞の大きさや形	
8		細胞膜の構造と性質、細胞膜における物質輸送の方法	
9		核、リボソーム、粗面小胞体、滑面小胞体、ゴルジ装置、リソソームの構造と働き、細胞内における物質の流れ	
10		ミトコンドリア、中心体の構造と働き	
11		液胞、葉緑体、細胞壁、細胞骨格の構造と働き、生物のタイプ：原核生物と真核生物、細菌の構造、ラン藻の構造、	
12		細胞の進化、ウイルスの構造、特徴、分類とさまざまなウイルスについて	
13		細胞周期、体細胞分裂、染色体、減数分裂、生殖細胞の形成	
14		復習	
15		試験解説、トピック	

その他の事項

- ・生物学は専門科目ではないが、生理学、解剖学の理解の助けになるので、しっかり勉強して下さい。
- ・パワーポイントを印刷したものを、配信後ほど配布するので、学習、復習に利用して下さい。
- ・対面授業では、復習や質問に対する対応も行なう。

推薦図書 絵でわかる細胞の世界 黒谷明美著 講談社サイエンティフィック 2001年発行
 医学を学ぶための生物学 谷口直之、米田悦啓編集 南江堂 2004年改訂第2版発行

授業概要			
学 科	第 1 鍼灸科	学 年	1 年
単 位 数	3	必要時間数	60
担当教員	臼井 明宏	学 期	通 年
授業形態	講 義	教 室	ホームルーム
授業目的	医学の基礎となる解剖学のうち、「骨、関節、筋といった運動器」を学び、実技授業や臨床でも活用できるよう、その知識を修得する。		
教科書	東洋療法学校協会編 解剖生理 医歯薬出版株式会社		

具体的な到達目標	
目標 1	骨について説明することができる（特徴、構造など）
目標 2	関節について説明することができる（特徴、構造、働きなど）
目標 3	筋について説明することができる（特徴、構造、起始停止、作用、支配神経など）
目標 4	
目標 5	
目標 6	
目標 7	
目標 8	
目標 9	
目標 10	

評価と試験			
前 期		後 期	
試験成績	80%		80%
平常点	20% 算出方法 課題等		20% 算出方法 課題等
出席点	算出方法		算出方法
その他	算出方法		算出方法
試験日			

* 追再試験、最終再試験にて合格の場合は、平常点や出席点、その他の評価は反映されず、試験成績のみが評価対象となります。

担当教員の実務経験	
実務経験	有 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/>
教員の実務経験	
実務経験をいかした教育内容	

授業の内容			
回数	日程	内容	備考
1		シラバス説明、第 1 章 C. 組織と器官(支持組織、筋組織)、第 2 章 A. 運動器系とは(1. 運動の仕組み、2. 解剖学的用語)	第 1~2 章
2		A. 運動器系とは(3. 骨の構造と機能、4. 関節の構造と機能)	第 2 章
3		A. 運動器系とは(5. 骨格筋の構造と機能((3) 筋線維と筋原線維は除く)	
4		A. 運動器系とは(7. 骨格筋の分類と補助装置(1) 赤筋と白筋は除く) B. 全身の骨格(関節可動域)	
5		A. 運動器系とは まとめ、問題演習など	
6		B. 全身の骨格(脊柱、胸郭)	
7		B. 全身の骨格(上肢の骨格)	
8		B. 全身の骨格(下肢の骨格)	

9	B. 全身の骨格(頭蓋骨)
10	B. 全身の骨格(脊柱～上肢のまとめ、問題演習など)
11	B. 全身の骨格(下肢～頭蓋骨のまとめ、問題演習など)
12	C. 全身の骨格筋(体幹部の筋) ①
13	C. 全身の骨格筋(体幹部の筋) ②
14	C. 全身の骨格筋(体幹部の筋)のまとめ、問題演習など
15	試験フィードバック、前期のまとめ
16	C. 全身の骨格筋(上肢の筋) ①
17	C. 全身の骨格筋(上肢の筋) ②
18	C. 全身の骨格筋(下肢の筋) ①
19	C. 全身の骨格筋(下肢の筋) ②
20	C. 全身の骨格筋(頭頸部の筋)
21	C. 全身の骨格筋(上肢～下肢)のまとめ、問題演習など
22	C. 全身の骨格筋(下肢～頭頸部の筋)のまとめ、問題演習など
23	C. 全身の骨格筋のまとめ
24	B. 体表解剖と主要な部位(体幹の体表解剖)
25	B. 体表解剖と主要な部位(上肢の局所解剖)
26	B. 体表解剖と主要な部位(下肢の局所解剖) ①
27	B. 体表解剖と主要な部位(下肢の局所解剖) ②
28	B. 体表解剖と主要な部位(頭頸部の体表解剖と局所解剖)
29	第12章のまとめ、問題演習など
30	試験フィードバック、後期のまとめ

その他の事項

<課題について>

範囲ごとに課題を実施し、その得点を20%換算したものを平常点といたします。

<担当者メールアドレス>

usui@butsugen.or.jp

授業概要

学 科	第2 鍼灸科	学 年	1 年	学 期	通 年
単 位 数	3	必要時間数	60	実施時間数	60
担当教員	奥村 清和				
授業形態	講義（動画＋対面）	教 室	ホームルーム		

授業目的

基礎医学である生理学を学習し習得することにより、他の科目や臨床への応用が期待できる。所定の教科書を利用して、その章の基準に従って授業を進めていきます。生徒のみなさんに教科書を読んでもらって、それに対して、説明・解釈を加えていきます。また、必要に応じて、自作のスライドを見てもらいながらの説明もあります。

教科書 解剖生理 医歯薬出版

具体的な到達目標

- 目標1 人体各部の機能を習得する。
- 目標2 習得した系統をつなぎ合わせて、理解を深める。
- 目標3 他の科目や臨床に応用できるようにする。
- 目標4
- 目標5
- 目標6
- 目標7
- 目標8
- 目標9
- 目標10

評価と試験

前 期			後 期		
試験成績					
平常点	なし	算出方法	なし	算出方法	
出席点	なし	算出方法	なし	算出方法	
その他		算出方法		算出方法	
試験日					

* 追再試験、最終再試験にて合格の場合は、平常点や出席点、その他の評価は反映されず、試験成績のみが評価対象となります。

担当教員の実務経験

実務経験 有 無

教員の実務経験

実務経験をいかした教育内容

授業の内容			
回数	日程	内容	備考
1		細胞の概要、遺伝子とゲノム	
2		細胞分裂、遺伝子発現	
3		体液と恒常性、体液の性質	
4		物質の移動	
5		第6章 血液と免疫（血液）、血液とその成分	
6		白血球、血小板と止血機構	
7		血液凝固、血液型	
8		第5章 循環系、心臓	
9		心臓の活動と検査	
10		血圧と脈拍	
11		血圧と脈拍、リンパ系	
12		第7章 呼吸器系、呼吸と換気、呼吸とその調節	
13		呼吸機能の測定	
14		酸素・二酸化炭素の運搬	
15		呼吸の調節	
16		第8章 消化器系と代謝・栄養（消化器系）、嚥下、胃液と胃運動	
17		小腸の運動、小腸における消化と吸収	
18		大腸の運動と分泌、排便、膵臓の外分泌機能	
19		肝臓の機能、食欲	
20		第10章 内分泌系と体温（体温）、概要	
21		体熱の産生と放散①	
22		体熱の産生と放散②	
23		温度受容器と体温調節中枢、体温調節機能	
24		第9章 泌尿器系、腎臓の機能	
25		尿の生成、糸球体におけるろ過	
26		尿細管における再吸収と分泌	
27		腎機能の測定	
28		尿の組成、体液pHの調整	
29		蓄尿、排尿反射	
30		予備	
その他の事項			

授業概要			
学 科	第 1 鍼灸科	学 年	1 年
単 位 数	3	必要時間数	60
担当教員	金井 優也	学 期	通 年
授業形態	講 義	教 室	ホームルーム
授業目的	本授業においては、医学の基礎となる解剖学のうち、「循環器系・呼吸器系・消化器系・泌尿器系」を重点的に学ぶ。 本授業では、国家試験に対応できる力を育成することにのみならず、他科目と確実に連携できることを目的として実施し、頭の中で人体の各臓器の構造が3次元で構成できることを最終的な目標とする。		
教科書	東洋療法学校協会 解剖生理 第1版		

具体的な到達目標	
目標 1	細胞、組織の構造について理解し説明することができる。
目標 2	心臓の構造を理解し説明することができる。
目標 3	全身の血管系の流れを理解し説明することができる。
目標 4	血管の構造を理解し説明することができる。
目標 5	リンパ系の役割・各種リンパ系器官の構造を理解し説明することができる。
目標 6	呼吸器の流れ、各呼吸器系器官の構造を理解し説明することができる。
目標 7	各消化器官の構造や流れについて理解し説明することができる。
目標 8	各泌尿器官の構造や流れについて理解し説明することができる。

評価と試験			
前 期		後 期	
試験成績	100%	100%	
平常点	— 算出方法 —	算出方法 —	
出席点	— 算出方法 —	算出方法 —	
その他	— 算出方法 —	算出方法 —	
試験日	—		

* 追再試験、最終再試験にて合格の場合は、平常点や出席点、その他の評価は反映されず、試験成績のみが評価対象となります。

担当教員の実務経験			
実務経験	有 <input checked="" type="checkbox"/>	無 <input type="checkbox"/>	
教員の实務経験			
実務経験をいかした教育内容			

授業の内容			
回数	日程	内容	備考
1		第1章 人体の構成：細胞、組織と器官について学ぶⅠ。ガイダンス。	
2		第1章 人体の構成：細胞、組織と器官について学ぶⅡ。 第5章循環系：循環の概要と血管の構造について学ぶ。	
3		第5章循環系：血管の構造と吻合、門脈の概要について学ぶ。	
4		第5章循環系：心臓の構造(位置・心膜・壁)について学ぶⅠ。	
5		第5章循環系：心臓の構造(房室・弁・刺激伝導系)について学ぶⅡ。	
6		第5章循環系：心臓の構造(心臓血管)について学ぶⅢ。	
7		第5章循環系：動脈循環と大動脈の流れと分枝(大動脈・胸大動脈)について学ぶⅠ。	
8		第5章循環系：動脈循環と大動脈の流れと分枝(腹大動脈)について学ぶⅡ。	
9		第5章循環系：動脈循環と大動脈の流れと分枝(総腸骨動脈)について学ぶⅢ。	
10		第5章循環系：動脈循環と大動脈の流れと分枝(上肢・頸部・顔面部)について学ぶⅣ。	
11		第5章循環系：静脈と胎児循環について学ぶ。	
12		第5章循環系：リンパ系(総論)について学ぶ。	
13		第5章循環系：リンパ系(リンパ節・脾臓)について学ぶ。	
14		第5章循環系：リンパ系(胸腺・扁桃)について学ぶ。	
15		第5章の総復習。	
16		第7章呼吸器系：鼻腔・副鼻腔・咽頭・喉頭について学ぶ。	
17		第7章呼吸器系：気管系・肺について学ぶ。	
18		第8章消化器系と代謝・栄養：消化管の壁構成について学ぶ。	
19		第8章消化器系と代謝・栄養：口蓋・軟口蓋・舌について学ぶ。	
20		第8章消化器系と代謝・栄養：歯・唾液腺・咽頭について学ぶ。	
21		第8章消化器系と代謝・栄養：食道・胃について学ぶ。	
22		第8章消化器系と代謝・栄養：小腸について学ぶ。	
23		第8章消化器系と代謝・栄養：大腸について学ぶ。	
24		第8章消化器系と代謝・栄養：肝臓・胆嚢について学ぶ。	
25		第8章消化器系と代謝・栄養：膵臓の・腹膜について学ぶ。	
26		第8章消化器系と代謝・栄養：消化器の位置・構造等を総括的に学ぶ。	
27		第9章泌尿器系：腎臓について学ぶⅠ。	
28		第9章泌尿器系：腎臓について学ぶⅡ。尿路(尿管)について学ぶⅠ。	
29		第9章泌尿器系：尿路(膀胱・尿道)について学ぶⅡ。	
30		第7章・8章・9章の総復習。	

その他の事項

解剖学は形態・構造の理解を目指す学問です。人体の構造に対する知識は、すべての医学分野の学習において欠く事のできないものと考えます。何度も反復学習することが重要になります。何か不明な点がございましたら、分からないままにせず、気軽に質問していただけたらと思います。

担当教員メールアドレス : y-kanai@butsugen.or.jp

授業概要			
学 科	第1鍼灸科	学 年	1 年
単 位 数	3	必要時間数	60
担当教員	田中 童菜	学 期	通 年
授業形態	講 義	教 室	ホームルーム
授業目的	「生理学」は生命現象の働きや作用機序について研究した学問であり、現代医学では基礎科目に分類される。本授業では、代謝・内分泌・生殖・神経の各分野について、健康成人の生理学的な人体の仕組みを学習する。臨床現場では患者が持つ疾患・症状の機序の説明や、他の医療従事者と連携をとる際にも必要な知識となり、また、あはき施術の効果を現代医学的に解釈する上でも非常に重要な科目である。 あはき師として、臨床時に患者の病態・施術を考える際に必要な基礎知識を身につける目的で授業を行なう。		
教科書	東洋療法学校協会 編、解剖生理 第1版、医歯薬出版 株式会社		

具体的な到達目標	
目標1	第8章：ATPを合成する過程について説明することができる。
目標2	第8章：ビタミン・ミネラルの役割について説明することができる。
目標3	第10章：ホルモンの種類と、その働きを説明することができる。
目標4	第10章：ホルモンの分泌器官・標的組織・分泌調整の流れを説明することができる。
目標5	第11章：月経周期とホルモンの関係を説明することができる。
目標6	第11章：受精から分娩後のホルモンによる身体変化について説明することができる。
目標7	第3章：活動電位の発生メカニズム、静止電位の成因を説明できる。
目標8	第3章：神経の興奮伝導、シナプス伝達の生理学的特性について説明することができる。
目標9	第3章：中枢神経系の部位ごとに働きを説明することができる。
目標10	第3章：末梢神経系(脳・自律神経)の各機能を説明することができる。

評価と試験		
	前 期	後 期
試験成績	期末試験 100%	期末試験 100%
平常点	算出方法	算出方法
出席点	算出方法	算出方法
その他	算出方法	算出方法
試験日		

*追再試験、最終再試験にて合格の場合は、平常点や出席点、その他の評価は反映されず、試験成績のみが評価対象となります。

担当教員の実務経験

実務経験	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/>
教員の实務経験	あん摩マッサージ指圧師・はり師・きゅう師の免許を有する。教員養成学科附属治療院で2年、あはき整骨院で2年間、出張開業で2年の実務経験あり。本校附属治療所で1年間の実務経験あり。
実務経験をいかした教育内容	代謝・栄養疾患、内分泌疾患、婦人科疾患、神経疾患など広い範囲へ繋がる内容となります。臨床時に想定される患者像と授業内容を、可能な限り関連付けながら進めていきます。

授業の内容		
回数	日程	備考
1	ガイダンス、第8章 B.代謝と栄養-1.代謝とは	P.226
2	第8章 B.代謝と栄養-2.糖質	P.226~227
3	第8章 B.代謝と栄養-3.脂質, 4.タンパク質	P.228~229
4	第8章 B.代謝と栄養-5.ビタミン, 6.ミネラル	P.230~231
5	第8章 B.代謝と栄養「まとめ」	
6	第10章 A.内分泌系の総論	P.244~247
7	第10章 B.内分泌系の各論-1.視床下部と下垂体	P.247~249
8	第10章 B.内分泌系の各論-2.甲状腺と副甲状腺, 3.ランゲルハンス島(膵島)	P.250~253
9	第10章 B.内分泌系の各論-4.(1~3)副腎皮質	P.253~255
10	第10章 B.内分泌系の各論-4.(4)副腎髄質, 5.その他のホルモン	P.255~256
11	第10章 B.内分泌系の各論-6.ホルモンによる体液の調整, 第10章「まとめ」	P.256

12		第 11 章 A. 生殖とは	P. 262～269
13		第 11 章 B. 妊娠と発生	P. 269～273
14		第 11 章 C. 生体のリズムと加齢変化	P. 273～276
15		第 11 章 「まとめ」	
16		第 3 章 A. 神経系と神経組織-1. 神経系の分類, 2. 神経組織	P. 82～84
17		第 3 章 A. 神経系と神経組織-3. 神経細胞の興奮と伝導, 4. シナプス伝達	P. 84～87
18		第 3 章 B. 中枢神経系-1. 中枢神経系の構造, 2. 中枢神経系の統合機能	P. 87～89
19		第 3 章 B. 中枢神経系-3. 大脳 (1)大脳の構造, (5)大脳の白質, (2)新皮質	P. 89, 92/P. 90～
20		第 3 章 B. 中枢神経系-3. 大脳 (2)新皮質, (3)大脳辺縁系, (4)大脳基底核	P. 90～92
21		第 3 章 B. 中枢神経系-4. 間脳, 6. 小脳	P. 93, 95～96
22		第 3 章 B. 中枢神経系-5. 脳幹	P. 94～95
23		第 3 章 B. 中枢神経系-7. 脳波と睡眠, 8. 脊髄, 9. 中枢神経系の保護と栄養	P. 96～100
24		第 3 章 A, B 「まとめ」	
25		第 3 章 C. 伝導路と運動調節-1. 運動性の下行路, 2. 感覚系の伝導路	P. 100～103
26		第 3 章 C. 伝導路と運動調節-3. 骨格筋の神経支配	P. 103～104
27		第 3 章 D. 末梢神経系-1. 脳神経	P. 106～112
28		第 3 章 D. 末梢神経系-3. 自律神経系	P. 121～
29		第 3 章 D. 末梢神経系-3. 自律神経系	P. 121～
30		第 3 章 C, D 「まとめ」	

その他の事項

「第 3 章 C. 伝導路と運動調節-4. 運動反射 / D. 末梢神経系-2. 脊髄神経」の項目は 2 年生の解剖生理で行なう内容です。専門用語に慣れることが、内容理解への第一歩です。焦らずに確認・復習を行なっていきましょう。勉強するための環境や仕組み作りも大切です。ご自身に合ったものを今から構築していきましょう。
メールアドレス : tanaka-w@butsugen.or.jp

授業概要			
学 科	第1鍼灸科	学 年	1 年
単 位 数	4	必要時間数	80
担当教員	下宮 啓佑	学 期	通 年
授業形態	講 義	教 室	ホームルーム
授業目的	経絡経穴概論は、はき学を学ぶ上で重要な柱の1つである。経穴は、身体各部の状態が体表上に反映される部位であり、同時に、刺激をすることで身体各部に影響を与えることができる、診断・施術において重要なポイントである。本講義では経絡の種類、作用、流れ、経穴の名称、部位、意義を学び、臨床において経穴を応用できる基礎知識を身につける。		
教科書	「新版 経絡経穴概論 第2版」(医道の日本社)		

具体的な到達目標	
目標1	督脈・任脈の流注、部位を覚える。
目標2	手の太陰肺経～足の厥陰肝経までの経絡の流注、部位を覚える。
目標3	取穴する上で必要な骨度法を覚える。
目標4	五行穴、五要穴を覚える。
目標5	奇経八脈・奇穴を覚える。
目標6	経絡経穴の現代的研究を覚える。
目標7	
目標8	
目標9	
目標10	

評価と試験			
前 期		後 期	
試験成績	80%	80%	
平常点	20%	20%	算出方法 小テスト⑨～⑮
出席点	算出方法	算出方法	
その他	算出方法	算出方法	
試験日			

*追再試験、最終再試験にて合格の場合は、平常点や出席点、その他の評価は反映されず、試験成績のみが評価対象となります。

担当教員の実務経験	
実務経験	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/>
教員の实務経験	
実務経験をいかした教育内容	

授業の内容			
回数	日程	内容	備考
1		シラバスの説明、経絡経穴の概要①	
2		経絡経穴の概要②、骨度法	
3		督脈の流注・経穴名・部位について①	小テスト①
4		督脈の流注・経穴名・部位について②	
5		任脈の流注・経穴名・部位について①	小テスト②
6		任脈の流注・経穴名・部位について②	
7		手の太陰肺経の流注・経穴名・部位について	小テスト③
8		手の陽明大腸経の流注・経穴名・部位について①	小テスト④
9		手の陽明大腸経の流注・経穴名・部位について②	

10	足の陽明胃經の流注・經穴名・部位について①	小テスト⑤
11	足の陽明胃經の流注・經穴名・部位について②	
12	足の陽明胃經の流注・經穴名・部位について③	
13	足の太陰脾經の流注・經穴名・部位について①	小テスト⑥
14	足の太陰脾經の流注・經穴名・部位について②	
15	手の少陰心經の流注・經穴名・部位について	小テスト⑦
16	手の太陽小腸經の流注・經穴名・部位について①	小テスト⑧
17	手の太陽小腸經の流注・經穴名・部位について②	
18	督脈～手の太陽小腸經の復習	小テスト⑨
19	足の太陽膀胱經の流注・經穴名・部位について①	
20	足の太陽膀胱經の流注・經穴名・部位について②	
21	足の太陽膀胱經の流注・經穴名・部位について③	
22	足の少陰腎經の流注・經穴名・部位について①	小テスト⑩
23	足の少陰腎經の流注・經穴名・部位について②	
24	手の厥陰心包經の流注・經穴名・部位について	小テスト⑪
25	手の少陽三焦經の流注・經穴名・部位について①	小テスト⑫
26	手の少陽三焦經の流注・經穴名・部位について②	
27	足の少陽胆經の流注・經穴名・部位について①	小テスト⑬
28	足の少陽胆經の流注・經穴名・部位について②	
29	足の少陽胆經の流注・經穴名・部位について③	
30	足の厥陰肝經の流注・經穴名・部位について	小テスト⑭
31	足の太陽膀胱經～足の厥陰肝經の復習	小テスト⑮
32	五行穴・五要穴について	
33	その他の要穴について	
34	胸腹部、腰背部の横並びについて	
35	奇經八脈について、奇穴について①	
36	奇穴について②	
37	四肢の筋と經穴の関係	
38	体幹の筋と經穴の関係	
39	総復習	
40	經絡經穴の現代的な研究について、参考資料について	

その他の事項

小テストは適宜、授業内で実施する。

担当教員(メールアドレス)
shimomiya@butsugen.or.jp

授業概要					
学 科	第1鍼灸科	学 年	1 年	学 期	通 年
単 位 数	4	必要時間数	80 時間	実施時間数	80 時間
担当教員	岩本 奈己				
授業形態	講 義	教 室	ホームルーム		
授業目的	東洋医学の基本事項を学び、それを踏まえた上で病が現れる過程を考えられるようになること、学習した範囲の国家試験問題の内容を理解できるようになることを目的とする。				
教科書	新版『東洋医学概論』（東洋療法学校協会編）医道の日本社				

具体的な到達目標	
目標1	東洋医学の特徴を説明できる。
目標2	生体物質や臓腑の生理を説明できる。
目標3	生体物質や臓腑の病理を説明できる。
目標4	経絡の病を説明できる。
目標5	病を引き起こす原因を説明できる。
目標6	陰陽学説、五行学説を説明できる。
目標7	東洋医学的な診察「四診」を説明できる。
目標8	弁証と論治を考えられる。

評価と試験			
前 期		後 期	
試験成績	80%	80%	
平常点	20%	20%	算出方法 小テスト
出席点	算出方法	算出方法	
その他	算出方法	算出方法	
試験日			

* 追再試験、最終再試験にて合格の場合は、平常点や出席点、その他の評価は反映されず、試験成績のみが評価対象となります。

担当教員の実務経験	
実務経験	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/>
教員の实務経験	はり師・きゅう師の免許を有する。教員養成科附属治療院で2年の実務経験あり。本校附属治療所で1年間の実務経験あり。
実務経験をいかした教育内容	鍼灸臨床や日常で遭遇する事柄の東洋医学的な見方の具体例を示し、2年次から始まる臨床実習で、不調の原因の予測や治療方針を大まかに考えられるように授業を行なう。

授業の内容

回数	日程	内容	備考
1		シラバス説明、東洋医学の歴史	第1章 P. 2～P. 12
2		人体の見方 陰陽学説、五行学説	P. 13～P. 17 第3章 P. 181～P. 200
3		東洋医学的治療、日本の東洋医学の現状	第1章 P. 18～P. 36
4		生体物質と神「精」 生体物質と神「気」	第2章 P. 37～P. 46 P. 42～P. 46
5		生体物質と神「血」 生体物質と神「津液」 人体における陰陽	P. 50～P. 51 P. 54～P. 56 P. 68～P. 69
6		生体物質の相互関係 生体物質と神「神」	P. 58～P. 62 P. 62～P. 67
7		蔵象「肝」 蔵象「胆」	P. 74～P. 81 P. 84～P. 85
8		蔵象「心」 蔵象「小腸」	P. 87～P. 90 P. 94～P. 95
9		蔵象「脾」 蔵象「胃」	P. 97～P. 100 P. 103、P. 105
10		蔵象「肺」 蔵象「大腸」	P. 106～P. 110 P. 113、P. 114
11		蔵象「腎」 蔵象「膀胱」	P. 115～P. 120 P. 123、P. 124
12		蔵象「心包」 蔵象「三焦」	P. 95 P. 125～P. 127
13		蔵象「奇恒の腑」	P. 75、P. 85～P. 87、P. 95～P. 97、 P. 124～P. 125
14		全身の気機	P. 143～P. 149
15		病因「外感病因」	P. 161～P. 167
16		病因「内傷病因」「その他の要因」	P. 168～P. 171
17		病機	P. 171～P. 173
18		生体物質と神「精の病理」	P. 40～P. 42
19		生体物質と神「気の病理」	P. 46～P. 49
20		生体物質と神「血の病理」	P. 51～P. 53
21		生体物質と神「津液の病理」 人体における陰陽「陰陽の病理」	P. 56～P. 57 P. 69～P. 73
22		蔵象「肝の病理、病証」 蔵象「胆の病理、病証」	P. 81～P. 84 (P. 74～P. 81) P. 84～P. 85
23		蔵象「肝の病理、病証」 蔵象「胆の病理、病証」	P. 81～P. 84 (P. 74～P. 81) P. 84～P. 85
24		蔵象「心の病理、病証」 蔵象「小腸の病理、病証」	P. 90～P. 94 (P. 87～P. 90) P. 94～P. 95
25		蔵象「心の病理、病証」 蔵象「小腸の病理、病証」	P. 90～P. 94 (P. 87～P. 90) P. 94～P. 95
26		蔵象「脾の病理、病証」 蔵象「胃の病理、病証」	P. 100～P. 102 (P. 97～P. 100) P. 103～P. 105
27		蔵象「脾の病理、病証」 蔵象「胃の病理、病証」	P. 100～P. 102 (P. 97～P. 100) P. 103～P. 105
28		蔵象「肺の病理、病証」 蔵象「大腸の病理、病証」	P. 110～P. 113 (P. 106～P. 110) P. 114 (P. 113)
29		蔵象「肺の病理、病証」 蔵象「大腸の病理、病証」	P. 110～P. 113 (P. 106～P. 110) P. 114 (P. 113)
30		蔵象「腎の病理、病証」 蔵象「膀胱の病理、病証」	P. 120～P. 123 (P. 115～P. 120) P. 123～P. 124
31		蔵象「腎の病理、病証」 蔵象「膀胱の病理、病証」	P. 120～P. 123 (P. 115～P. 120) P. 123～P. 124
32		経絡「十二経脈の病理、病証」	P. 150～P. 160
33		経絡「十二経脈の病理、病証」「奇経八脈の病理、病証」	P. 150～P. 160
34		四診ガイダンス（脈診） 四診 望診	第4章 P. 201、P. 255～P. 265 P. 202～P. 210
35		四診 聞診	P. 213～P. 218

36		四診 問診	P. 219～P. 247
37		四診 問診	P. 219～P. 247
38		四診 切診	P. 249～P. 265
39		四診 切診	P. 249～P. 266
40		弁証、治法「補瀉」	第 5 章 P. 270～P. 280、P. 286、P. 290～ P. 291

その他の事項

- | | |
|---------------|----------------|
| ① 陰陽五行 | ⑥ 生植物質の病理 |
| ② 生植物質の生理 | ⑦ 蔵象 臓腑の病理 I |
| ③ 蔵象 臓腑の生理 I | ⑧ 蔵象 臓腑の病理 II |
| ④ 蔵象 臓腑の生理 II | ⑨ 十二経脈の病証、四診 I |
| ⑤ 病因、病機 | ⑩ 四診 II |

小テスト予定

担当教員アドレス : n.iwamoto@butsugen.or.jp

授業概要					
学 科	第1鍼灸科	学 年	1 年	学 期	前 期
単 位 数	1	必要時間数	20	実施時間数	20
担当教員	岩本 奈己				
授業形態	講 義	教 室	ホームルーム		
授業目的	鍼灸施術において、利用する鍼と灸に関する道具の名称や術式など、基礎的な知識を理解することは、施術を円滑に進めるためには必要な知識である。そのため、本授業では鍼灸の基礎知識を学習する。 また、はり師きゅう師が患者の受療の可否の判断をすること、鍼灸施術を行うにあたって意図的に鍼灸刺激の調節ができる必要がある。本授業では、安全に施術を行えるように、鍼灸治療の適応や禁忌などのリスク管理について学習する。				
教科書	教科書執筆小委員会、はりきゅう理論、医道の日本社				

具体的な到達目標	
目標1	鍼の基礎知識として（各部の名称・長さ・太さ・鍼尖の形状）を説明することができる。
目標2	古代九鍼の種類と使用方法について説明することができる。
目標3	刺鍼の方式〔撚鍼法・打鍼法・管鍼法〕と刺鍼の術式〔押手・刺手・切皮など〕を説明することができる。
目標4	刺鍼中の手技について説明することができる。
目標5	特殊鍼法の種類と特徴について説明することができる。
目標6	灸の基礎知識（灸の材料・線香について）を説明することができる。
目標7	灸術の種類とその特徴を説明することができる。
目標8	鍼灸施術の刺激量や感受性について説明することができる。
目標9	鍼灸施術の適応症、禁忌について説明することができる。
目標10	リスク管理（施術上の一般的注意、鍼灸療法の過誤と副作用、感染症対策）について説明することができる。

評価と試験			
前 期		後 期	
試験成績	100%	100%	
平常点	算出方法	算出方法	
出席点	算出方法	算出方法	
その他	算出方法	算出方法	
試験日			

*追再試験、最終再試験にて合格の場合は、平常点や出席点、その他の評価は反映されず、試験成績のみが評価対象となります。

担当教員の実務経験	
実務経験	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/>
教員の实務経験	〔岩本〕はり師・きゅう師の免許を有する。教員養成科附属治療院で2年の実務経験あり。本校附属治療所で1年間の実務経験あり。
実務経験をいかした教育内容	鍼灸施術を安全に行うために必要な基礎知識を教授する。

授業の内容			
回数	日程	内容	備考
1		シラバスの説明 第1章 概論 第2章 鍼の基礎知識	P. 1~P. 2 P. 3~P. 8
2		第2章 鍼の基礎知識 第3章 刺鍼の方式と術式	P. 3~P. 8 P. 9~P. 14
3		第3章 刺鍼の方式と術式	P. 9~P. 14
4		第5章 灸の基礎知識 第6章 灸術の種類	P. 21~P. 24 P. 25~P. 28

5		第6章 灸術の種類	P. 25～P. 28
6		第4章 特殊鍼法	P. 15～P. 20
7		第4章 特殊鍼法	P. 15～P. 20
		第7章 リスク管理「安全対策の基本」	P. 29～P. 33
8		第7章 リスク管理「感染対策」	P. 34～P. 38
9		第7章 リスク管理「有害事象の種類と対処法」	P. 39～P. 45
10		第7章 リスク管理「有害事象の種類と対処法」 復習	P. 39～P. 45

その他の事項

担当教員アドレス : n.iwamoto@butsugen.or.jp

授業概要					
学 科	第1鍼灸科	学 年	1 年	学 期	通 年
単 位 数	3	必要時間数	90	実施時間数	90
担当教員	棟居清峰・下宮啓佑・田中童菜				
授業形態	実 習	教 室	第1実技室		
授業目的	本授業は、基本的な刺鍼の手順、安全な鍼操作を理解、習得することが目的である。また、鍼灸臨床におけるステンレス鍼と銀鍼の使用方法を学び習得することで基礎を構築する				
教科書	教科書執筆小委員会、はりきゅう実技〈基礎編〉第2版、医道の日本社、1992年				

具体的な到達目標	
目標1	治療家として、清潔感のある身だしなみ（実習着・靴・頭髪・爪）を整えることができる
目標2	衛生操作（手指消毒・綿花の扱い・消毒）が正確にできること
目標3	安全に刺鍼することができるように一連の手順を正確にできること
目標4	刺鍼に関わる動作（揉捻法・押手・切皮・刺入・抜鍼）が適切に行えること
目標5	指定された角度・深度に刺鍼することができること

評価と試験			
前 期		後 期	
試験成績	55%（試験合格を以って55%を加算する）	55%（試験合格を以って55%を加算する）	
平常点	35% 算出方法 「その他の事項」に記載	35% 算出方法 「その他の事項」に記載	
出席点	10% 算出方法 「その他の事項」に記載	10% 算出方法 「その他の事項」に記載	
その他	算出方法	算出方法	
試験日			

* 追再試験、最終再試験にて合格の場合は、平常点や出席点、その他の評価は反映されず、試験成績のみが評価対象となります。

担当教員の実務経験	
実務経験	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/>
教員の实務経験	〔棟居〕はり師・きゅう師の免許を有する。鍼灸院にて9年間の実務経験あり。教員養成科附属治療院にて2年間、往診専門で2年間、本校附属治療所で13年間の実務経験あり。 〔下宮〕はり師・きゅう師の免許を有する。整形外科、鍼灸整骨院にて4年間の経験あり。他校附属治療院にて6年間の実務経験あり。本校附属治療所で4年間の実務経験あり。 〔田中〕あん摩マッサージ指圧師・はり師・きゅう師の免許を有する。教員養成学科附属治療院で2年、あはき整骨院で2年間、出張開業で2年の実務経験あり。本校附属治療所で1年間の実務経験あり。
実務経験をいかした教育内容	鍼灸臨床に必要とされる衛生操作と、安全に刺鍼するための基礎実技を行う。

授業の内容		
回数	内容	備考
1	オリエンテーション [シラバスの確認・実技室の使い方・道具の確認・道具の準備・手洗いについて]	
2	両手挿管、片手挿管の方法、刺鍼練習台を用いて片手挿管の練習	
3	刺鍼の手順 [揉捻法・押手・刺手・切皮・弾入・抜鍼]	
4	反復練習 (刺鍼の手順 [揉捻法・押手・刺手・切皮・弾入・抜鍼])	
5	直刺での刺鍼、送り込み刺法、刺入深度について	
6	反復練習 (直刺での刺鍼、送り込み刺法、刺入深度について)	
7	直刺での刺鍼、旋捻刺法	
8	反復練習 (直刺での刺鍼、旋捻刺法)	
9	直刺での刺鍼、送り込み刺法・旋捻刺法	
10	反復練習 (直刺での刺鍼、送り込み刺法・旋捻刺法)	

- 11 人体への刺鍼手順、消毒手順、十七手技〔副刺激術、置鍼術、示指打法、刺鍼転向法〕
- 12 自身の体への刺鍼〔下腿〕、反復練習〔前回授業内容〕
- 13 自身の体への刺鍼〔下腿〕、反復練習〔前回授業内容〕、消毒手順確認
- 14 自身の体への刺鍼〔下腿〕、斜刺での刺鍼
- 15 自身の体への刺鍼〔下腿〕、直刺・斜刺での刺鍼
- 16 片手挿管、刺鍼の手順、消毒手順の確認
- 17 自身の身体への刺鍼〔下腿〕、反復練習〔直刺・斜刺〕
- 18 自身の身体への刺鍼〔下腿〕、十七手技〔単刺・雀啄術〕
- 19 自身の身体への刺鍼〔下腿〕、反復練習〔直刺〕
- 20 試験
- 21 試験
- 22 他者の体への刺鍼〔下腿〕、タオルの取り扱い方
- 23 他者の体への刺鍼〔下腿〕、十七手技〔間歇術〕、消毒手順確認
- 24 他者の体への刺鍼〔腰部〕、十七手技〔屋漏術〕
- 25 他者の体への刺鍼〔腰部〕、試験十七手技〔振せん術〕
- 26 他者の体への刺鍼〔上・中背部〕、十七手技〔旋撚術〕、鍼寸3の取り扱いについて
- 27 他者の体への刺鍼〔上・中背部〕、十七手技〔回旋術〕
- 28 他者の体への刺鍼〔上肢〕、十七手技〔随鍼術〕
- 29 他者の体への刺鍼〔上肢〕、十七手技〔内調術〕
- 30 他者の体への刺鍼〔腹部〕、十七手技〔細指術〕
- 31 他者の体への刺鍼〔頸部〕、十七手技〔鍼尖転移法〕
- 32 他者の体への刺鍼〔頸部〕、十七手技〔管散術〕
- 33 他者の体への刺鍼〔背部〕
- 34 他者の体への刺鍼〔腰背部〕
- 35 他者の体への刺鍼、仰臥位と伏臥位の刺鍼
- 36 他者の体への刺鍼、仰臥位と伏臥位の刺鍼
- 37 他者の体への刺鍼、仰臥位と伏臥位の刺鍼
- 38 他者の体への刺鍼、仰臥位と伏臥位の刺鍼
- 39 鍼と灸を合わせての施術〔仰臥位・伏臥位〕
- 40 鍼と灸を合わせての施術〔仰臥位・伏臥位〕
- 41 鍼と灸を合わせての施術〔仰臥位・伏臥位〕
- 42 試験
- 43 試験
- 44 鍼と灸を合わせての施術〔仰臥位・伏臥位〕
- 45 鍼と灸を合わせての施術〔仰臥位・伏臥位〕

その他の事項

【共通】

- <試験成績> 55% (試験合格を以って55%を加算する)
- <出席点> 10% (3/4以上の出席を以て10%を加算する)
- <平常点> 35%

【平常点内訳】

- [授業内実技確認 20%] 授業内に実技内容を確認・評価し20%に換算する。(授業内実技確認日は別途アナウンスします。)
- [その他 15%] 以下の内容、1回チェックにつき1点減点とする。
 - 実習着・上履き：清潔であること、規定のものを着用すること。忘れた場合、授業見学は認めるが、実技への参加は不可とする。
 - 実技に必要な道具・備品 (バスタオル、枕用タオル、シーツは持参のアナウンスがあって以降) を忘れた場合。
 - 身だしなみ：別紙 (実技実習に関する身だしなみルール) に準ずる。
 - 授業開始前までに連絡のない欠課、遅刻等。

- ・鍼の基礎実技は授業時間だけで習得することは非常に困難です。 積極的な日々の自主練習があって、初めて習得できる技術ですから 毎日、練習の習慣を付け、先ずは1年間毎日練習をしてください。
- ・実技試験には、授業担当者以外の教員が入る可能性があります。

【学校全体の目標】

課題に対して誤差なく、決められた刺法で刺入できること。

【1年生の目標】

- 1年生では誤差±5mm以内で刺入できること。
- ※但し、目的の深度が1cmの場合は下限を7mmとする。
- (直刺) 90°を目標として刺鍼する。

1年生は誤差 $\pm 15^\circ$ 以内で刺入できること

(斜刺)基本 45° を目標として刺鍼する。

1年生は 45° に対して誤差 $\pm 15^\circ$ 以内で刺入できること。

斜刺は流注に沿っての角度を計測することとする。

授業概要					
学 科	第1鍼灸科	学 年	1 年	学 期	通 年
単 位 数	3	必要時間数	90	実施時間数	90
担当教員	棟居清峰・高橋佑輔・岩本奈己				
授業形態	実 習	教 室	第1実技室		
授業目的	臨床において、広く行われている灸法である知熱灸と透熱灸を、施術において用いることができるようにすることが本授業の目的である。知熱灸と透熱灸という灸法の手順を理解し、灸の基礎的な操作を学習する。				
教科書	教科書執筆小委員会、はりきゅう実技〈基礎編〉第2版、医道の日本社、1992年				

具体的な到達目標	
目標1	治療家として、清潔感のある身だしなみ（実習着・靴・頭髪・爪）を整えることができる。
目標2	衛生操作（手指消毒・綿花の扱い・消毒）が正確にできること。
目標3	安全に施灸することができるよう施灸の手順が正確にできること。
目標4	散艾から指定された大きさの艾炷を作成することができること。
目標5	作成した艾炷に安全に着火することができ、線香を安全に扱えること。

評価と試験					
前 期			後 期		
試験成績	55%（試験合格を以って55%を加算する）		55%		
平常点	35%	算出方法 「その他」に記載	35%	算出方法 「その他」に記載	
出席点	10%	算出方法 「その他」に記載	10%	算出方法 「その他」に記載	
その他	算出方法		算出方法		
試験日					

* 追再試験、最終再試験にて合格の場合は、平常点や出席点、その他の評価は反映されず、試験成績のみが評価対象となります。

担当教員の実務経験	
実務経験	有 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/>
教員の实務経験	<p>〔棟居〕はり師・きゅう師の免許を有する。鍼灸院にて9年間の実務経験あり。教員養成科附属治療院にて2年間、往診専門で2年間、本校附属治療所で13年間の実務経験あり。</p> <p>〔高橋〕はり師・きゅう師の免許を有する。免許取得後、教員養成科時代に附属治療院にて2年間の実務経験あり。本校附属治療所で4年間の実務経験あり。</p> <p>〔岩本〕はり師・きゅう師の免許を有する。教員養成科附属治療院で2年の実務経験あり。本校附属治療所で1年間の実務経験あり。</p>
実務経験をいかした教育内容	鍼灸臨床に必要とされる衛生操作と、安全に施灸するための基礎実技を行う。

授業の内容		
回数	内容	備考
1	オリエンテーション [シラバスの確認・実技室の使い方・モグサの確認・道具の確認・身だしなみ]	
2	お灸の概要、施灸の練習方法、艾炷を捻る指の動きの練習	
3	反復練習	
4	米粒大艾炷の作成 [手拭い]	
5	米粒大艾炷の作成 [板]	
6	線香の扱い方、艾炷への着火、米粒大艾炷の作成 [板]	
7	反復練習	
8	灸療リングの使い方、米粒大艾炷の作成 [紙]	
9	反復練習	
10	米粒大艾炷の作成 [竹]	
11	[板・紙・竹]を用いて施灸の反復練習	

- 12 人体への施灸手順、知熱灸の方法 [板の上での練習]
- 13 自身の体への施灸 [失眠]
- 14 自身の体への施灸 [失眠・湧泉]
- 15 自身の体への施灸 [下腿]
- 16 他者の体への施灸 [失眠]、ベッド操作、タオルの扱い、声掛け
- 17 他者の体への施灸 [失眠・湧泉]
- 18 他者の体への施灸 [下腿]
- 19 艾炷を捻る指の動き、艾炷の大きさ、着火など施灸動作一連の流れの確認
- 20 試験
- 21 試験
- 22 半米粒大の艾炷作成 [板・紙]
- 23 透熱灸の方法 [板の上での練習]、自身の体への施灸 [失眠]
- 24 自身の体への施灸 [失眠・湧泉]
- 25 他者の体への施灸 [失眠]
- 26 他者の体への施灸 [失眠・湧泉]
- 27 仰臥位と伏臥位の施灸、米粒大・半米粒大、知熱灸・透熱灸の使い分け
- 28 他者の体への施灸 [腰部]
- 29 他者の体への施灸 [背部]
- 30 他者の体への施灸 [上肢]
- 31 他者の体への施灸 [腹部]
- 32 他者の体への施灸 [下肢]
- 33 他者の体への施灸 [腰背部]
- 34 他者の体への施灸 [腹部]
- 35 他者の体への施灸 [上肢・下肢]
- 36 他者の体への施灸 [肩背部]
- 37 他者の体への施灸 [仰臥位・伏臥位]
- 38 灸と鍼の施術 [仰臥位・伏臥位]
- 39 灸と鍼の施術 [仰臥位・伏臥位]
- 40 灸と鍼の施術 [仰臥位・伏臥位]
- 41 灸と鍼の施術 [仰臥位・伏臥位]
- 42 試験
- 43 試験
- 44 台座灸
- 45 灸と鍼の施術 [仰臥位・伏臥位]

その他の事項

【共通】

- <試験成績> 55% (試験合格を以って 55%を加算する)
- <出席点> 10% (授業コマ数の 3/4 以上を以て 10%に加算する)
- <平常点> 35%

【平常点内訳】

- [提出物 15%] 全提出の 3/4 以上提出を持って 15%に加算する。提出期限厳守。
- [授業内実技確認 5%] 授業内に実技内容を確認・評価し 5%に換算する。(授業内実技確認日は別途アナウンスします。)
- [その他 15%] 以下の内容、1 回チェックにつき 1 点減点とする。
 - 実習着・上履き：清潔であること、規定のものを着用すること。忘れた場合、授業見学は認めるが、実技への参加は不可とする。
 - 実技に必要な道具・備品 (バスタオル、枕用タオル、シーツは持参のアナウンスがあって以降) を忘れた場合。
 - 身だしなみ：別紙 (実技実習に関する身だしなみルール) に準ずる。
 - 授業開始前までに連絡のない欠課、遅刻等。

- ・灸の基礎実技は授業時間だけで習得することは非常に困難です。積極的な日々の自主練習があって、初めて習得できる技術ですから毎日、練習の習慣を付け、先ずは 1 年間毎日練習をしてください。
- ・実技試験には、授業担当者以外の教員が入る可能性があります。

【学校全体の目標】

人体に対し 3 分間で 12 壮、半米粒大の透熱灸 (熱緩和を行う) ができること。

【1 年生の目標】

1 年生では 3 分間に米粒大 8 壮、半米粒大 10 壮

(例) 失眠穴へ 3 分間 (半米粒大) と透熱灸、熱緩和あり、左右交互 10 壮施灸できること。

1 年生は、紙への施灸は (200 壮/週) 10, 000 壮 (通年)

